

# 国光の塚群

新潟県柏崎市国光の塚群発掘調査報告

1983

柏崎市教育委員会

# 国光の塚群

新潟県柏崎市国光の塚群発掘調査報告

1983

柏崎市教育委員会



## 序

この調査報告書は、東京電力柏崎刈羽原子力発電所建設に係る送電線鉄塔建設に伴い柏崎市教育委員会が主体となって実施した、柏崎市大字北条に所在する“国光の塚群”的発掘調査記録である。

最近県内では多くの塚が調査され幾つかの成果もみられるが、本市においては初めての本格的な塚の発掘調査であった。とくに北条地区は塚の中地域でもある。今回の調査で本地域における塚の全体像が明らかになつたわけではないが、塚研究上の手懸りを得られたとすれば意義深いことと思われる。この調査の成果が地方史や考古学研究の一助となれば幸いである。

なお、本調査に御参加いただいた調査員はもとより、御指導・御協力を賜った新潟県教育委員会や、更に調査の計画から実施に至るまで格別の御配慮をいただいた東京電力第二送電建設所新潟工事事務所及び新新潟幹線第一企業体の方々をはじめ、御協力いただいた地元の方々に心からお礼申しあげる次第である。

柏崎市教育委員会

教育長 山田恒義

## 例　　言

- 1 本報告書は新潟県柏崎市大字北条字国光地内に所在する国光の塚群9号塚・10号塚・11号塚の発掘調査の記録である。発掘調査は東京電力送電鉄塔建設設計画に伴い、柏崎市が昭和57年度に東京電力第二送電建設所から受託して実施したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は柏崎市教育委員会が調査主体となり、昭和57年6月21日から7月28日まで実施したものである。
- 3 遺物の整理・復元並びに造構・遺物の実測・拓本、写真撮影及び插図の作成は調査担当の品田高志が行い、石器の実測・トレースは伊藤恒彦が行った。
- 4 発掘調査における出土遺物は一括して市教育委員会が保管・管理している。
- 5 本報告書の執筆は発掘担当品田が行い、付録は調査員品田定平が執筆した。
- 6 発掘調査から本書の作成に至るまで下記の諸氏及び諸機関から御指導・御助言並びに御配慮を賜った。（敬称略）　五十音順

伊藤恒彦、柏崎市史編さん室、柏崎市立図書館、金子拓男、川又昌延、東京電力第二送電建設所新潟工事事務所柏崎・刈羽支所、中村弘平、新新潟幹線第一企業体、新潟県教育委員会、藤巻正信、箕輪一博

## 発掘調査体制

調査主体　柏崎市教育委員会

代表　教育長　山　田　恒　義

総　括　九　田　昭　三（社会教育課長）

管　理　仲　野　新　一（〃　課長補佐）

小　林　清　祐（〃　課係長）

庶　務　橋　崎　ア　イ　子（〃　課主査）

内　山　敏　夫（〃　課主事）

調査担当　品　田　高　志（〃　課学芸員）

調　査　員　品　田　定　平（市文化財調査審議委員）

# 目 次

I 序 説 .....	1		
1. 発掘調査に至る経緯			
2. 発掘調査の経過			
II 遺 跡 .....	3		
1. 地理的環境			
2. 歴史的環境			
3. 立地と現状			
4. 形態と構造			
(1) 封土の層区分	(2) 9号塚	(3) 10号塚	(4) 11号塚
III 遺 物 .....	16		
1. 龍文時代			
2. 歴史時代			
IV 考 察 .....	18		
1. 塚の現状と視点			
2. 国光の塚群について			
付 編 .....	21		

## 図版目次

- 図版第1図 遺跡遠景（北側から），遺跡遠景（南西側から）  
図版第2図 7号塚（北西側から），8号塚（北西側から）  
図版第3図 9号塚（北西側から），9号塚発掘スナップ  
図版第4図 9号塚E-F断面（北東側から），9号塚A-B断面（西側から）  
図版第5図 9号塚基壇部（北西側から），9号塚基壇部（南側から）  
図版第6図 10号塚（北側から），10号塚発掘スナップ  
図版第7図 10号塚G-H断面（北東側から），10号塚B-C断面（西側から）  
図版第8図 10号塚南東部溝発掘スナップ，10号塚南東部溝土層面（北東側から）  
図版第9図 10号塚基壇部（南西側から），10号塚基壇部（北西側から）  
図版第10図 11号塚（北西側から），11号塚発掘スナップ  
図版第11図 11号塚C-D断面（西側から），11号塚頂部礫出土状態（西側から）  
図版第12図 11号塚基壇部（北西側から），11号塚基壇部（南西側から）  
図版第13図 調査区全景（北東側から），縄文土器出土状態（西側）から  
図版第14図 縄文土器，縄文土器・須恵器  
図版第15図 石斧・剣片・礫，発掘調査参加者

## 挿図目次

- 第1図 遺跡位置図 ..... 4  
第2図 国光の塚群と周辺遺跡 ..... 6  
第3図 国光の塚群7号塚・8号塚・9号塚・10号塚・11号塚全測図 ..... 7・8  
第4図 9号塚・10号塚・11号塚実測図 ..... 11・12  
第5図 9号塚断面図 ..... 13  
第6図 10号塚断面図 ..... 14  
第7図 11号塚断面図 ..... 15  
第8図 出土遺物実測図・拓本 ..... 17

## 表目次

- 第1表 発掘調査工程表 ..... 2

# I 序 説

## 1 発掘調査に至る経緯

国光の塚群は、地元に伝承や記録もなく、ただその存在が知られるのみであった。昭和28年8月、北条郷土史研究会のメンバーであった故高橋国市・品田定平両氏によって初めて遺跡として確認されたが、公表されるまでには至らなかった。

昭和54年9月、東京電力柏崎刈羽原子力発電所建設に伴う送電計画ルートが公表された際、塚群の一部が鉄塔建設予定地にかかることが判明した。これを知った県文化財保護指導委員品田定平氏によって昭和55年9月に本塚群の存在が県教育委員会に報告され、この旨東京電力側にも通知された。併行して鉄塔建設予定地の変更について事前協議を行ったが、他に適当な所がなくやむを得ず発掘調査を実施し、記録保存することとなった。昭和56年3月、東京電力北部送変電建設所から文化庁に対し、文化財保護法第57条の3の規定に基づく埋蔵文化財包蔵地に係る土木工事の届出を提出、4月に折返し発掘調査を行うよう通知された。7月には東京電力から市及び市教育委員会に対し発掘調査の依頼文書が提出され、幾度かの協議の結果昭和57年8月までに発掘調査を実施することとなった。雪の積り始めた12月半ばに、担当者レベルで最終的な現地協議が行われた。これらの経緯を経て市教育委員会では調査体制を組織し、昭和57年5月に文化庁に対し文化財保護法第98条の2の規定に基づき発掘調査の実施を通知、発掘調査の準備に着手した。

なお、昭和57年6月、柏崎市と東京電力第二送変電建設所との間で委託契約を締結し、費用については依頼者である東京電力が全額負担するものとした。

## 2 発掘調査の経過（発掘調査日誌抄）

発掘調査は柏崎市教育委員会（教育長 山田恒義）が主体者となり、社会教育課職員を中心に調査体制を組織した。また地元の深沢・家近・東条の各集落の有志の方々に調査作業員として協力を得、昭和57年6月21日から7月28日まで、延24日間にわたって実施した。

調査区は鉄塔ルートのセンターラインを中心に、敷地内に測量用も兼ね5mメッシュのグリッドを設定した。さらに塚に十文字の土層観察用のベルトを設け、これによって区画された区を何号塚何区と呼称した。出土遺物は主にグリッドと区で取上げた。また塚周辺区域も可能な限り調査することとしたが、土捨場や廃土の流出防止等の関係から尾根筋に沿った上部の平坦部を調査範囲とした。

6月21日、器材を搬入する。伐採済で塚の外形を観察できる7号塚から11号塚の現状写真の撮影を行う。東電及び工事関係者と土捨場・土留等について打合せを行う。22日は現場休憩所の整理・整頓を行い、5mメッシュのグリッドを設定した。11号塚から現状のセンター測量に着手、

24日まで継続する。基準は絶対レベルから割出し、10cmセンターとした。

6月28日、本日から作業員を投入する。発掘調査対象が塚であるため、北条・普広寺住職から供養していたとき、調査担当以下調査作業員全員が参列した。セクションベルトを設定し、表層部の雜木根の除去及び表土剥ぎを開始した。11号塚4区の表層から須恵器片が出土。

6月29日、11号塚墳丘部の発掘に着手する。30日は11号塚墳丘発掘と併行して、10号塚の発掘に着手する。B-12(10号塚4、6区)から龜文中期の土器片が出土。

7月5日、9号塚の発掘に着手し、観察を終了した断面から順次土層図の作成を開始する。なお、6日には11号塚頂部表層付近からこぶし大の丸礫を検出した。また各塚の基壇部や周溝の確認を行い、10日には10号塚前底部に浅いピット状の遺構を検出している。13日には11号塚の基壇部の写真撮影も終わり、調査区全体の完掘写真を撮影した。

7月15日から調査区域外にある7号塚・8号塚のセンター測量を行う。16日から9号塚・10号塚・11号塚の基壇の実測及びセンター測量を開始し、20日に調査を終了した。

7月21日に器材の撤収を行い、作業員の手配等に協力していただいた深沢区長宅に赴き、引揚げの挨拶をする。

7月28日、調査区域外の未伐採地区に存在する2号塚から6号塚の分布図を作成。本塚群の大半は方形墳丘であることが判明した。なお、1号塚については、塚であるかどうか疑問視されていたため、道路によって削土された切通断面の土層観察を行った。この結果、盛土が存在せず地山のみによって塚状の形態を呈しており、塚とは認められず、地頭であろうと判断した。本塚群は、2号塚から11号塚までの10基で成立していることが明らかとなった。

これで発掘調査に係る全ての現場作業を終了した。

日付	器具搬入・撤収	測量	表土剥ぎ	9号塚調査	10号塚調査	11号塚調査
6.21						
22						
23						
24						
25						
26						
27						
28						
29						
30						
7. 1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
19						
20						
21						
22						
23						
24						
25						
26						
27						
28						
29						
30						
31						

第1表 作業工程表

## II 遺 跡

### 1 地理的環境

柏崎市は北流する鶴川・鈴石川の2大河川によって形成された沖積平野を中心にしてひらけた街である。この平野は、北東に延びる東頭城丘陵が取り囲み、北には日本海が広がる。海岸部には荒浜砂丘地が形成され海と平野とを隔している。古代においては、この砂丘形成のため河川がせきとめられ潟湖をなしたこともある。“鏡ヶ神”と称せられ、佐藤ヶ池などはその名残りである。西部は米山山地が海岸までせり出し、断崖を形成する。南部は黒姫山から延びた丘陵地帯が徐々に高度を下げて、沖積地に没している。東部は東頭城丘陵に源を発する刈羽・三島丘陵が発達し、鈴石川の支流別山川・長鳥川の水源となっている。

国光の塚群は、鈴石川と長鳥川の合流地点近くに立地する。この付近の長鳥川には、八石山塊から流れ出る多くの小河川が集中し、丘陵地には幾つもの深い沢が形成されている。本塚群は、この沢と沢と交錯して舌状に延びる尾根の末端部に構築されている。この尾根からは、間近に八石山遠くに米山、黒姫山と刈羽三山と称する山々を一望でき、眼下に沖積地を見渡すことができる。

### 2 歴史的環境

現在の柏崎市・刈羽郡・三島郡は、越後國七郡のひとつ三嶋郡に相当し、国光の塚群が所在する北条地区もその内にあった。『倭名類聚抄』にはその郷名として「三嶋郷」・「高家郷」・「多岐郷」の三郷が記載されている。郷域については、『延喜式』の駅馬所在地等から郡内東北部に多岐、西南部に三嶋、中部に高家が存在しただろうと推測されてはいるが定かではない。従って北条地区がどの郷に属するかについては想像の域を出でてはいない。また『延喜式』には式内社として六社が記されているが、そのうちの御嶋石部神社が北条に所在する。旧市街は鶴川・鈴石川の堆積物と、その上の砂丘上に成立しているが、集落が形成されたのは江戸時代以降のことであり、またその内側には鏡ヶ神が存在していた。このため古代の交通路は鏡ヶ神南岸を大きく迂回していたものと考えられる。この南岸道と多岐に抜ける海岸道、東頭城から鶴川上流域を経て鈴石川中流域に抜ける山間道の合流点として、北条は重要な位置を占めていたと推定できる。

中世も後半になると三嶋郡は、「刈羽郡」・「三島郡」と称されるようになる。刈羽郡内には佐橋荘、鶴川荘、比角荘、長橋荘、原田保(莊)などが存在したと言われているが、その荘域については憶測のみで確認されていない。佐橋(鈴石)荘の荘域は鈴石川・長鳥川流域一带に比定され、北条地区もその内に属した。佐橋荘は、鎌倉時代初期には六条天皇領、室町時代初期には万寿寺領であった。13世紀半ばの宝治合戦後、大江広元の孫毛利經光が佐橋荘の地頭職に補任されて南条に館を構えた。その後毛利氏は北条城を築き、城下に館を移して北条氏を称した頃から漸次荘園内に勢力を延ばし、南北朝の動乱期を経た14世紀後半には佐橋荘全域をほぼ支配下に収めたものと



第1図 国光の塚群と周辺遺跡

(註5)  
推測できる。

近世では、北条地区一帯は「刈羽郡鶴石庄北條郷」と称され、南条村、北条村、小島村、山渕村、広田村、長島村の六ヶ村から成っていた。国光の塚群の所在する北条村は、慶長3年上杉景勝の会津移封に伴い、春日山城主となった細秀治の封にはいった。宝永7年松平越中守定重が伊勢国桑名から高田城主に移封されその支配下に入るまで幾度となく支配者が代わった。以後明治新政に至るまで白河領、桑名領と変遷するが、領主は松平越中守であることには変わりはなかった。また江戸時代には街道が整備されていたが、脇街道佐渡路のひとつ三国街道が北条郷を東西に貫き、北条村には宿駅が設けられていた。しかし、柏崎のように宿泊地ではなく通行路であったこと、幕末には鶴石川流域を経由する道の利用が盛んになったことなどからしだいに衰微し、明治6年郵便制度の実施により北条宿は廃止された。  
(註6)

註1 新沢佳大(1970)『柏崎編年史 上巻』

2 御船石部神社は、刈羽郡西山町石地にも存在し、式内社がそのどちらに比定されるかは定説がない。

3 新沢佳大(1970)註1と同じ。

4 金子達(1976)「刈羽郡の荘・保」かみくひむし第21号

磯貝文嶺(1977)「柏崎地方の四莊園に関する考察 — 文治二年未進荘々のうち —」  
柏崎・刈羽第5号

比角荘は柏崎市比角付近に比定されるが、史料では2回知見し得るのみで、19世紀初頃成立した『白川風土記』では、この一帯を鶴石庄鏡郷としており荘域を明確にし得ない。また南方の高柳方面には、大神荘があったとする説があり定かでない。

5 磯貝文嶺(1977)註4と同じ。

6 北条町史編纂委員会(1971)『北条町史』

#### 〈周辺の塚(群)と山城〉

1. 菊尾城跡 2. 吉井百塚 3. 矢口城跡 4. 与三城跡 5. 高内城跡 6. 片屋城跡 7. 八方口塚群 8. 山渕城跡 9. 小島塚群 10. 宮ノ下塚群 11. 大山塚群 12. 吉井黒川城跡 13. 高津塚 14. オカラシバ塚群 15. アキンボ塚 16. 広田の百塚 17. 広田城跡 18. 三輪塚群 19. 國光の塚群 20. 北条城跡 21. 今熊の百塚 22. 七面塚群 23. 小坂塚群 24. 宮ノ入塚群 25. 北条館跡 26. じょうきん塚 27. 神ノ倉塚 28. 平城跡 29. 南条館跡 30. 久之木塚群 31. 小番城跡 32. 菩根城跡 33. 加納城跡 34. 安田明神桜塚 35. 馬塚 36. 長者堀塚 37. 上野井川経塚 38. 安田城跡

### 3 立地と現状

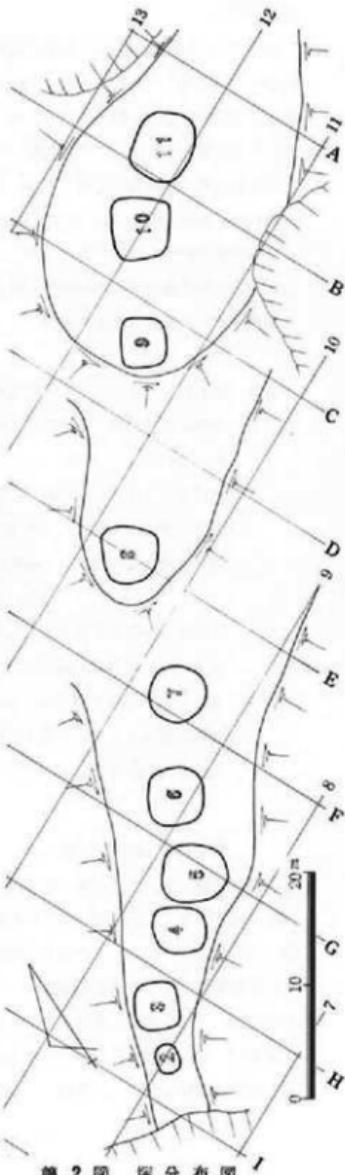
本塚群は、柏崎市大字北条字国光2489-1ほかに所  
在し、八石山塊から延びる沢に挟まれた尾根末端に構  
築されている。西に緩やかに延びるこの尾根は、馬背  
状を呈し両側は急な斜面となっている。標高40~50m、  
長さ90mの間に10基の塚が群在する。水田面との比高  
差は11号塚付近で約25mである。現状は全て山林で、  
松と雜木に覆われていた。南側尾根斜面下部の緩斜面  
には階段状に畑作が行われているが、尾根上はわずか  
な平坦地に塚が群在していることから耕作は行われず、  
塚自体にも盗掘の痕跡もなく、保存状態は良好である。

塚は尾根筋に沿ってほぼ直列に構築されている。尾  
根は西に伸長・傾斜するが、その級急から3段の階段  
状にみることができ、この地形的觀点に従っても本塚  
群を3群に区分することができる。I群は尾根先端部  
の下段にあたり、2号塚から7号塚までの6基が構築  
されている。3群中最も密集して存在し、各塚の間隔  
は2m前後と狭く、最も広い6号塚と7号塚の間隔で  
も4mである。また各塚の上辺には、周溝もしくは周  
溝様に封土用の土砂を撒削した跡とおもわれる同心円  
状の凹みが認められる。平面形態は概ね方形であるが、  
2号塚は南北に長軸をもつ長方形を呈している。また  
7号塚は一基のみ円形を呈する可能性の高いものであ  
る。塚の規模としては、3, 5, 6号塚が墳丘高1m  
前後と大型で目立つ存在である。

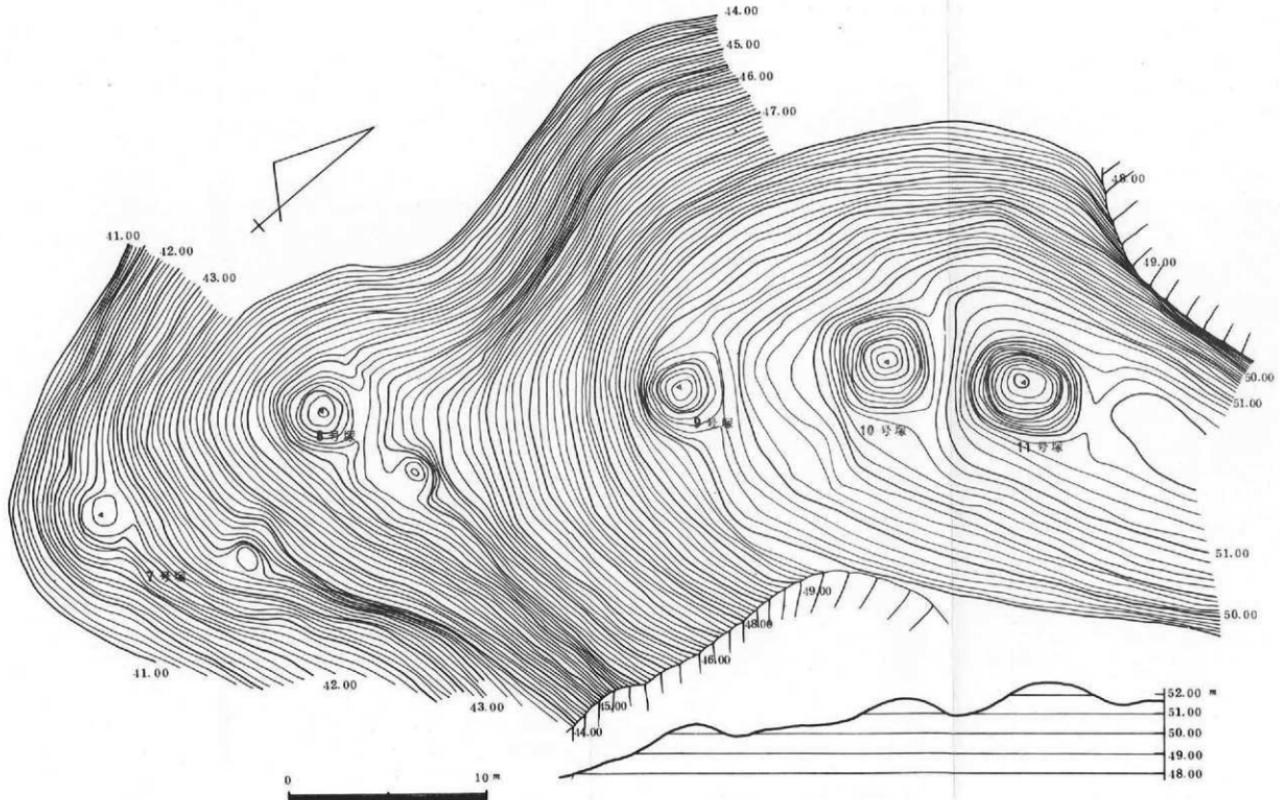
II群は8号塚1基のみで、中段の緩傾斜面のI群と  
II群の間に単独的に構築されている。地形的制約によ  
ったものとも考えられる。平面形は方形を呈し、墳丘  
高は約0.8mを計る。

III群は尾根上段の平坦部にあたり、9号塚から11号  
塚の3基が構築されている。11号塚は本塚群中最大の  
ものである。調査はこのIII群を対象としたものである。

なお、8号塚東、南2ヶ所に凹地が存在するが、こ  
れは炭窯である可能性が強いと思われた。



第2図 塚分布図



第3図 国光のダム群：7号坝・8号坝・9号坝・10号坝・11号坝全測図

#### 4 形態と構造

##### (1) 封土の層区分

封土は、塚周辺に堆積している黒褐色旧表土(Ⅰ)層と黄褐色地山土(Ⅳ)層が盛土として利用されている。Ⅱ層とⅢ層の混合度合から4層に区分することができる。Oa層はⅢ層を主体としたもので、Ⅱ層を少量しか含まないか、もしくはⅣ層単独の黄褐色が強くしまりがある。Ob層はⅢ層とⅣ層との混土で、Ⅳ層の割合が多く、暗黄褐色を呈し、ややしまりがある。Oc層はOb層と同様Ⅱ層とⅣ層との混土で、Ⅱ層の割合が多く明黒褐色・茶褐色を呈する。Ob層はⅡ層を主体とし、Ⅳ層を少量含むか、もしくはⅡ層単独の黒褐色を呈する。

##### (2) 9号塚

本塚は尾根上段の肩部に構築され、C-9に位置する。平面形は方形を呈し、下部主軸線はN-30°-Eで尾根筋に沿っているが、上部は若干ねじれている。規模は一辺4.1m、墳丘高は現状で約0.7mを計り、築造当時は同溝底から約1mと推定される。墳丘はその表層部が1b層中に流出していると考えられるが、保存状態は良好である。

基壇は、表土上に平面形を設定し周辺を掘削して基壇部を造出し、掘上げた土砂を封土としている。このため基壇はⅡ層とⅢ層からなっている。斜面の傾斜が強い下方部では、基壇の造出しがⅢ層まで達せず、範囲は明確でない。

封土は、第1段階として傾斜の急な下方部にOc、Od層を盛り、塚墳丘下部をある程度水平に整地した後に、上部封土を盛っている。中層位は、断面の土層観察から四方より盛られたと推測でき、Oa層からOd層の各層が存在している。墳頂部をなす上層位には、Ob層が2層に分けられて盛られている。全体として地山土の割合が多いため、盛土はややしまりのあるものであった。

付属遺構としては同溝があり、尾根上方、塚の北側を半周する形で確認された。傾斜を利用して全体として浅いものである。他の遺構は存在しなかった。

遺物は何も出土せず、塚築造の時期や目的等は明確にできなかった。

##### (3) 10号塚

本塚は尾根上段の緩やかな傾斜部に構築され、B-11・12に位置する。平面形は企画化した方形を呈し、主軸線は9号塚と同じN-30°-Eで尾根筋に沿っている。規模は一辺6m、墳丘高は現状で約0.9mを計り、築造当時は同溝底から約1.1mと推定される。調査対象中最も形状が整っており、一見して方形と識別できるほど保存状態は良好であった。

基壇は、9号塚と同一方法で設定されたもので、Ⅱ層とⅢ層からなり、尾根に沿って西南に傾斜している。平面形はかなりしっかりした方形を呈し、壁は四辺全てに巡っている。

封土は、第1段階として下層位にOa層からOd層の各層を盛り、次に中層位によくしまったOa層で基礎固めをしている。上層位は黒褐色系のOc層、Od層を盛り、その上をOd層で覆ってい

る。地山土が多いため、全体によくしまっている。

付属遺構としては、周溝が一応全周するが、両壁が存在するのは北東部の尾根上方側のみで、他の3辺については基壇部壁しかなく、周溝とは言い難い。また塚の南西側の前庭部に長径1.46m×短径0.86m、深さ0.15mの浅いピット状の遺構が確認された。基壇前庭部の中央に位置し、長軸は塚主軸線に直交している。塚前庭部を意識して掘られたピットの可能性が強いが、周溝底残部の可能性もあり断定できない。覆土は自然堆積であり、周溝覆土と同じ様相を呈し、黒褐色土が堆積した後に上層部をIb'層が覆っている。この遺構内から遺物の出土はなかった。なお、塚南東側の塚袖部から1.1m離れて、幅0.9m、現存する長さ4.6m、深さ約0.2mの溝が検出された。長軸はN-25°-Eで、10号塚の主軸にはほぼ平行する。覆土は、第1層黒褐色土である。この付近だけ地山に小砂利が多く含まれているため、覆土も全体的に小砂利を多く含む砂質性の土層である。他に遺構は存在しなかった。

遺物は何も出土せず、塚築造の時期や目的等は明確にできなかった。

#### (4) 11号塚

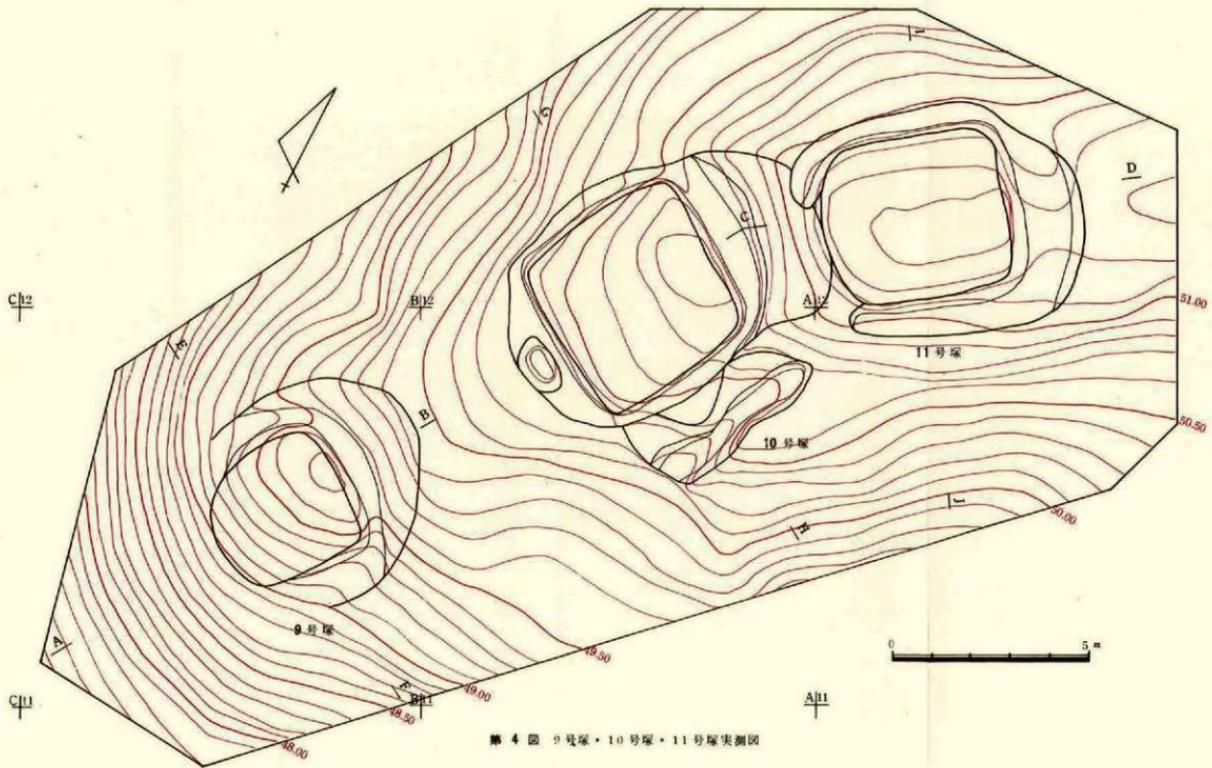
本塚は尾根上段の平坦部に構築され、群中の最高位を占め、A-13に位置する。平面形は、当初円形を呈するものと考えられたが、調査の結果長方形を呈することが確認された。主軸線はN-54°-Eであり、東に傾きを変えた尾根軸線にはほぼ一致している。規模は長辺6.5m×短辺5.6m。墳丘高は現状で約1.3mを計り、築造当時は周溝底から約1.4mと推定され、本塚群中最大である。墳丘は、長方形が丸みを帯びて梢円形状となっているが、保存状態は概ね良好である。

基壇は、9号塚・10号塚と同一方法で設定されたもので、Ⅰ層とⅡ層からなり、ほぼ平坦である。平面形は長方形であるが、尾根地山地形の影響を受けてか、前方辺はやや丸みをもっている。

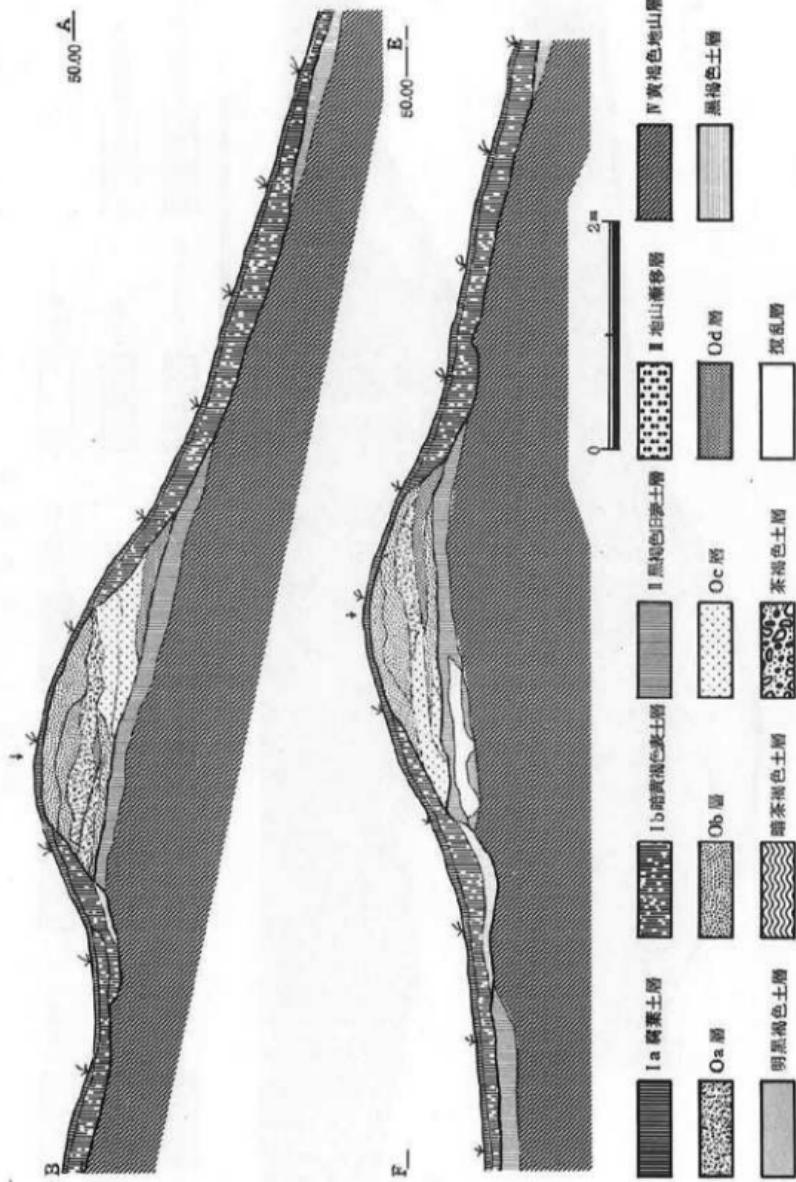
封土は、Ob層とOc層が大半であり、全体的にしまりも粘性もなく、乾燥してやわらかい。墳丘の現状が長方形よりも梢円形状に近くなった一因であると考えられる。

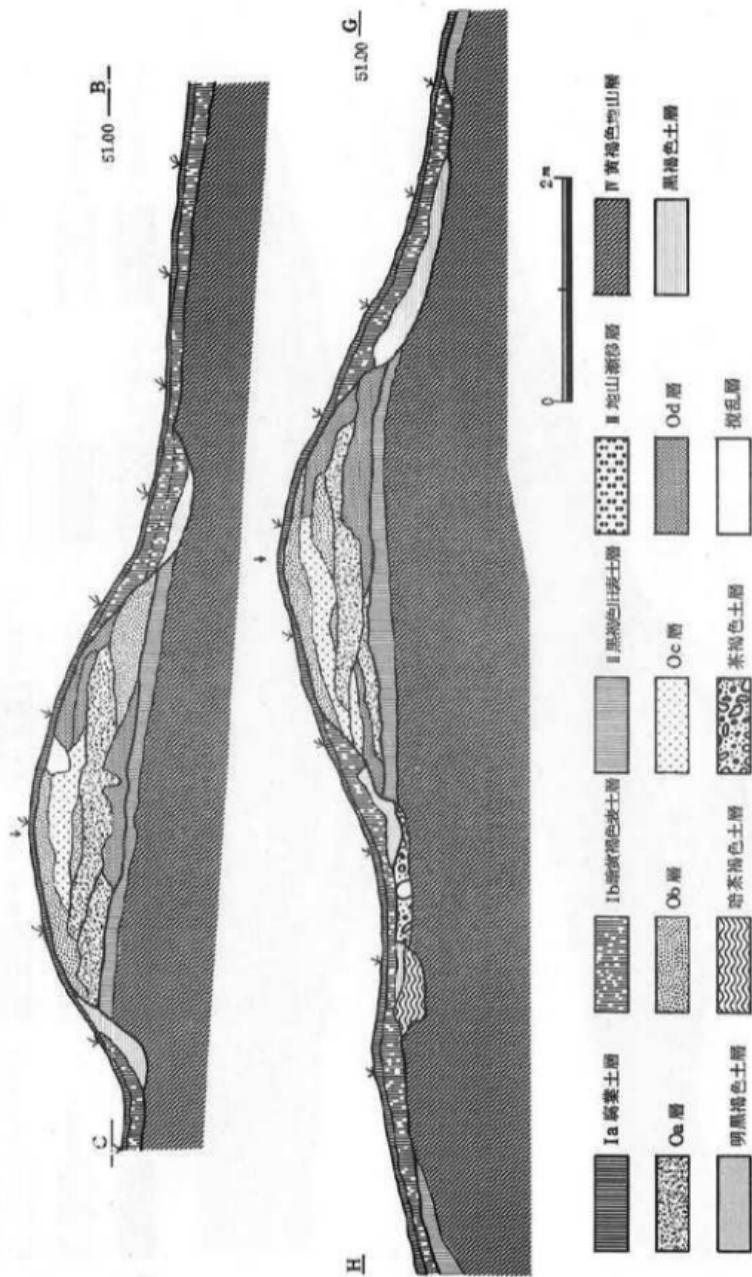
周溝は、幅0.7m、壁は基壇側で約0.45mであるが、外側は0.05m程しかなく、土層観察によって確認したものである。また前方辺は10号塚築造時による削土のためか、周溝は隅部にわずかに認められるのみであり、基壇範囲も明確でない。なお、土塗等の基壇部地山層への掘込みはなく、塚に関係する特別な遺構は存在しなかった。

遺物としては、塚頂部から拳大の縄が出土しただけで、他には何の遺物の出土もなく、塚築造の時期や目的等を明確にできなかった。

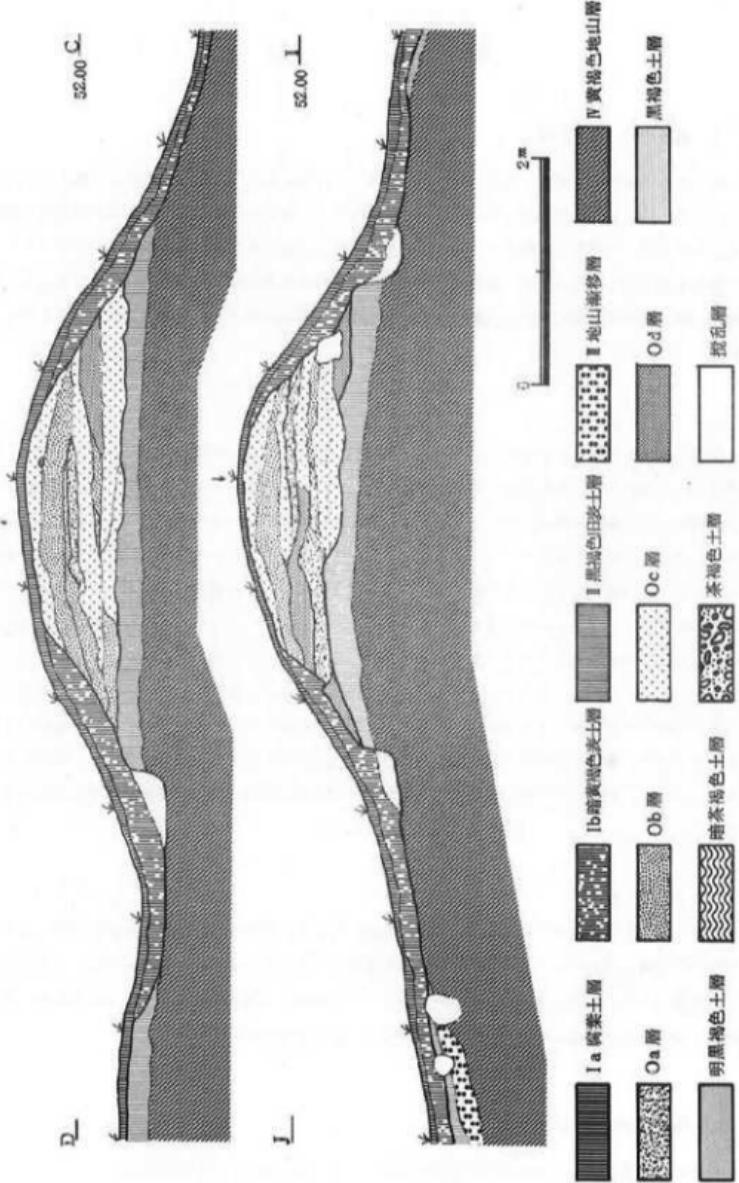


第4图 9号堰·10号堰·11号堰实测图





圖面號 10 号



### III 遺 物

#### 1 繩文時代(第8図)

繩文時代の国光は、集落を営むための空間が狭く、今回の調査でも住居址や炉址・焼土等は検出されなかった。しかし遺物はわずかに出土し時期的にも一時期の所産であり、中期前葉北陸の新崎式土器に比定され得る。遺跡のセトルメントとしては、中期前葉の極短期間に営まれたDパターンに相当するものと考えられる。遺物は主に調査区縁辺付近の黒褐色旧表土層から出土している。深構築の際、尾根平坦部に堆積した遺物包含層にあたるⅡ層が塚封土として使用された結果と考えられる。

##### (1) 土 器

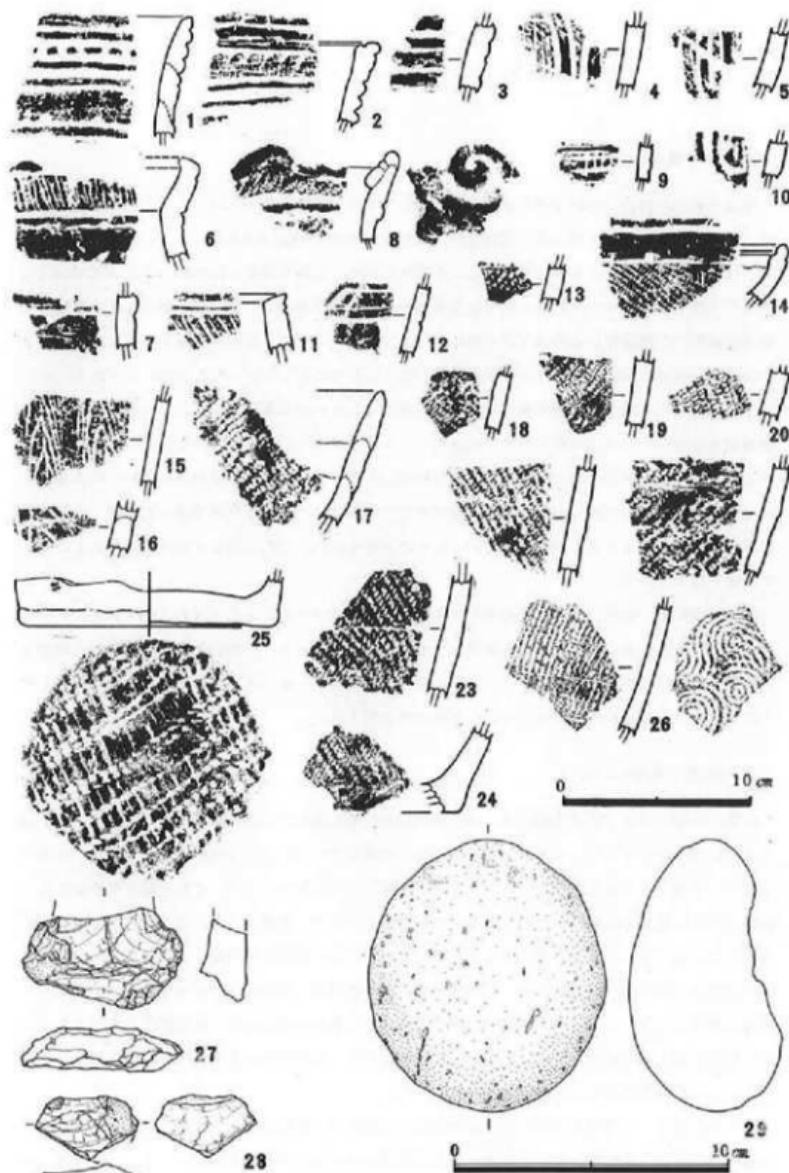
土器は約50片余りが出土したが、全体の器形まで窺えるものは皆無で全て小破片であった。器形は大半が深鉢形で、浅鉢形は1点(14)のみであり、波状を呈するものではなく、全て平縁である。深鉢形には頭部が屈曲するもの(6)と、緩やかにやや胸部の張るもの(8)、底部から緩く外反しながら口縁に至るもの(1, 2など)、口縁でやや内湾するもの(11)などがある。文様としては半截竹管状工具によって隆線文、爪形文(1, 9)、平行線文(6, 11)、刺突状に施文するもの(2)などがある。また口唇部に一条の沈線を施すもの(2, 14)もある。地文としては縄文には、PL単節を多用し、LP単節をわずかに用いる。また木目状撚糸文(15, 16)もわずかにみられる。25はスダレ状の圧痕を残す、大型深鉢形の底部である。焼成は普通程度のものと、不良でかなりローリングを受け摩滅して文様等が判別しにくいものとがあり、两者それぞれ半々を占める。胎土には粒径1mm未満の砂粒を多く含むものが大半である。器壁はヒビ割状を呈するものが多く、内面の調整痕を残すものは稀である。色調は茶褐色から黄褐色を呈するものがほとんどである。

##### (2) 石 器 類

27は安山岩質の打製石斧であり、基部が欠損している。刃部両側縁からやや難な調整を施す。刃部に使用痕は認められない。裏面には主要剝離面を大きく残している。図右を刃部として使用した可能性もある。28は安山岩質の剝片である。29は11号塚頂部から出土した礎であり、縄文時代に持ち込まれたものの再利用の可能性がある。使用痕は認められない。

#### 2 歴史時代(第8図)

歴史時代の遺物としては26の須恵器裏胴部片が1片出土しているのみである。



第 8 図 出土遺物実測図・拓本

# N 考 察

## 1 塚の現状と視点

塚は一般的には何らかの宗教や信仰などと関わりを持つものと考えられる。また名称や由来・伝承から墳墓、経塚、行人塚などある程度具体的に性格付できるものがあるが、数多く存在する塚にあっては一握でしかない。大半は発掘をしても遺物もなく、伝承も現在には伝わらず、塚に対する信仰どころかその存在すら忘れ去られているものが多い現状である。これらの一因として、幕末から明治新政期の文明開化による西洋化の波によって、伝統的な習俗・慣習が軽視されはじめ、戦後の占領時代と高度成長期を経てその風潮が国内の隅々にまで侵透していったことが考えられる。60年に一度催される庚申年供養を例にとっても、昭和55年の庚申年行事の行われたのは県内では妻有地方を中心に16市町村のみで、全体の15%にも満たない。<sup>(註1)</sup> このような状態では次に庚申年が巡ってきても、供養行事の次第を知る人が極端に少なくなり、今後庚申信仰がどれだけの命脈を保てるかは、悲観的推測しかできない。塚に対する信仰はどのような形態であったかはっきりしないが、庚申信仰よりも早くから廢れていったものと考えられ、これが現在における塚研究上の大きな障壁となっている。

国光の塚群も、何時、誰が、何の目的で築造したのか全く不明であると言わざるを得ない。このような塚（群）に対して、どのような視点をもって望めばよいか、が問題となる。外観からの個々の形態的分類による基礎的データーと、発掘調査による成果に基づき、更に信仰など塚を築造した人を介在させた総体の中で理解していく必要があるだろう。<sup>(註2)</sup>

## 2 国光の塚群について

国光の塚群の所在する北条地区は、塚の分布調査の最も進んでいる地域のひとつである。第1図をみても明らかのように、かなりの数の塚（群）が確認されている。分布の特徴としては、大半が尾根上に立地し、平地部にあるのは“じょうきん塚”一基のみであるが、これも地形変換線に近い位置にある。屋根上に築造しなければならない理由としては、展望がきき、他所からも見える必要があったこと、少ない耕地を避けたなどが考えられる。また塚の築造時期が不明なため山城との関連性は確証がないが、安田城周辺、北条城周辺、南条館周辺、山淵城・畔屋城周辺、広田城周辺、鳥谷ノ城周辺に分布していると見ることもできる。この観点から言えば、本塚群は北条城もしくは広田城と関連する可能性が強い。しかし、山城と塚とは、立地条件に共通性がみられるため、その結果として視覚的に表われただけとも考えられる。<sup>(註3)</sup>

塚には形態として単独と群集との二者があり、それぞれに意味をもっていたと思われる。県内には単独で存在する塚が多いといわれるが、北条地区には単独で存在する形態よりも、3~7基、10~17基、夏波百塚のように52基を教えるものなど、群集形態を示すものが多い。分布調査が進む

過程で群集塚が増加する可能性が強いと考えるが、現時点では北条地区に分布する塚の一特徴といえる。群集塚には築造する数の決まっていないもの、十三塚のように数が決まっているもの、百塚のように多数が築造されるものがある。国光の場合、10基で構成されており、特別な伝承もなく、また消滅した塚もないため、何かの目的で築造した結果10基になったものと思われる。塚群全体を、I、II、III群にわけたが、今回は上段第II群3基の調査であったため、各群毎の比較はできない。国光の塚群を築造した人々が、3群を意図していたかについては不明であるが、上段と下段とでは標高差が10mあり、意識せざるを得ないと考えられる。また築造順序も、一時期に全てを築造した場合と、各群毎あるいは適宜築造され時間幅をもつ場合とが考えられる。塚を築造する時、目的にかなう最良の場所を設定すると思われるが、群を形成する場合においても最適地は1ヶ所となる。計画的に群集塚を築造する場合、結果が同じならば順序は無関係であってもよい。しかし塚自体が信仰等に関わりをもつとすれば、その中心主体から築いて行くのが順当であろう。国光における“最適地”は最も展望のきく上段平坦部にあたり、III群からII・I群へと築造していった可能性が強い。II群の築造順序を、封土の分析から考察してみたい。1号塚の封土は第II層黒褐色土が大半を占め、10、9号塚は第IV層黄褐色土が半分以上を占めている。11号塚築造時、その予定地周辺には第II層がプライマリーに堆積しており、このため黒褐色土を主体とした封土となつた。11号塚築造による黒褐色土の掘削のため、10号塚築造時には黄褐色地山土露呈部分がかなり広がっていたものと考えられる。9号塚についても、11号塚と10号塚の関係10号塚築造の影響を受けたものと考えられる。以上のことから11号塚→10号塚→9号塚という築造順序を推定できる。塚群全体も塚号数とは逆の順に築造されたのではないだろうか。但し、11、10、9号塚全ての基壇に第II層が認められることから、3基のプランを全て設定した後に盛土のための掘削作業を行ったと考えられ、上段第II群については一時期に築造されたと考えたい。

塚の平面形としては方形、円形がある。しかし最近の県内調査例をみると大半は方形を呈し、円形を呈するものは極希少な存在であると言える。<sup>(註5)</sup> 分布調査で確認される塚の多くは現状が山林であり、墳丘には厚く腐葉土が堆積している。また築造後降雨等の影響で本来の形状に崩れが生じている場合も多いと考えられ、円形と誤認されるケースが多いのではないかだろうか。本塚群は調査した3基全てが方形（1号塚は長方形）を呈し、調査区域外の各塚も7号塚を除いて全て方形である可能性が強い。7号塚も調査すれば方形を呈する可能性は十分存在するものとおもわれる。塚の墳丘形態について、金子拓男氏は3タイプに大別している。<sup>(註6)</sup> その分類に従えば、「方形プランで断面が台形をなす塚」に近いが、本塚群では断面が台形を呈するものはひとつもなく、全て半円形である。保存状態が良好な塚群でもあり、ある程度の崩れを想定しても台形状を呈する可能性は薄く、「方形プランで断面が半円形をなす塚」として別途に分類するのが妥当であろう。

本塚群の築造目的が何であったかは、遺物の出土もなく、伝承も残っておらず不明である。塚を密教との関連から風大塚や地大塚などに分類する説があるが、本塚群の封土における黒褐色土は盛土する際の偶然性が強く、密教的宗教理論の具象化したものとは理解できない。しかし、封土中には礫や周辺で出土している縄文土器等の一切の混入物がなく、盛土の際にも“塚”的意味

を強く意識していたことが窺える。また本塚群の盟主的存在である 11 号塚の墳頂部から、拳大の鏃が出土した。鏃の出土位置及び他 2 基の塚には何の遺物も認められなかったことから、他に類例を見出せないが、意図的に埋設した可能性が強い。なお、本塚群の築造時期については確証がないが、中世後期から近世前期頃と推定しておきたい。

- 註 1 滝沢秀一（1981）「新潟県要有地方における庚申年供養行事について」貝塚 27  
物質文化研究会
- 2 戸根与八郎（1979）「新潟県における塚について」狐山塚群 — 国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書 新潟県教育委員会
- 3 戸根与八郎（1979）「遺跡」狐山塚群 — 国道 116 号線埋蔵文化財発掘調査報告書  
新潟県教育委員会  
狐山塚群周辺の遺跡（塚と山城など）分布から、塚と山城は有機的関連性を持っているものと考えられるとしている。
- 4 戸根与八郎（1974）「新潟県における塚について」川治百塚第 6 号塚 — 北越北線埋蔵文化財発掘調査報告書 新潟県教育委員会
- 5 新潟県教育委員会（1974）北越北線埋蔵文化財発掘調査報告書（川治百塚第 6 号塚）  
〃 （1976）北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書（地蔵塚）  
〃 （1979）国道 116 号線埋蔵文化財発掘調査報告書（狐山塚群）  
〃 （1978）長岡ニュータウン遺跡調査報告書（I）（蛇山 7 号塚）  
〃 （1979）長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書（II）（蛇山 10 号塚・中山 1 号塚・中山 2 号塚）  
〃 （1980）長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書（III）（中山 3 号塚・中山 4 号塚）  
長岡市教育委員会（1978）長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書（中山 5 号塚・座禅塚）  
〃 （1981）川袋の塚発掘調査報告書
- 吉川町教育委員会（1979）大乗寺塚群発掘調査報告書  
〃 （1980）河沢塚発掘調査報告書
- 6 金子拓男（1974）「川治百塚と第 6 号塚の性格」北越北線埋蔵文化財発掘調査報告書
- 7 註 6 と同じ。

## 付 編

### 北条地域の塚群に思う

北条という地域には山城の跡が数多くある。その城跡の尾根沿いには塚群が付続するかのようにある。長島の鳥谷ノ城址には大角間の百塚、広田城址には妙廣寺の裏手に百塚、北条城址には今熊の百塚、百塚といつても數が必ず百あるわけではない。城の大手がよく見える尾根の先端に塚群が築かれている。しかも集落に近い所にありながら、今日住民の生活に密着せず、信仰の対象にもならず、なんの伝承もなく唯これを畏すことを忌み嫌ってきたのみである。

北条の地域全体には塚の点在する地点は数多くあって、丘陵に直列に築かれてるもの、尾根の先端に築かれてるもの、數も數基であったり一基であったりしている。何れも道に沿って築かれている。それに塚の立地は必ず何処か見渡せる見晴しのよい所に築かれている。これらはなにを目的に築かれた塚なのだろうか。供養のためとか埋葬のために築いた塚もある。

北条の下の八幡社の裏手の塚が掘り起されたことがある。中世の壺が出土した。壺の底に穴があいていたので骨蔵器だろうと当時いわれていたという。木村睦子さんが所有している。數年前畠之原の高畠場塚が県道工事のさい破壊され、骨蔵器らしき壺が出た。數片の陶器片を離いでみると近世のものと思われた。岩ノ入の「ソデガク」の方形塚は、かつて正平十五年六月下旬、糸子教白と銘があり、「カ」梵字のある磁石板碑が建立されていたという。今は八社宮に移され祀られている。杉平のソデ山塚は討れた殿様の首塚だと伝承がある。これらは埋葬塚であり供養塚である。夏波の百塚は変っていて陵線とその尾根に沿って、T字形に塚が築かれ、T字形の接点には方形塚が配され、塚の四隅に小さな円形塚が付属している。塚全体で五十二基を数えている。むかしは九十九基数えたが誰も残り一基が判らず懲れなかったと古老が話してくれたことがある。百塚は、百数えたものはたたりがないと伝承してきた。泉の「オモヤ」と名告る入沢家の墓地に方形塚が二基あったが今は湮滅した。鹿島の御島石部神社の旧本宮跡という大場山に塚が一基あるし、大場山から深沢城址に向っての尾根にも數基の塚がある。八石山の中腹に同社の元屋敷という神の倉にも塚が一基あり珠洲の甕の破片が數点出土した。塚といえば墓と考える知識だけでは、常識の域を出ないし、またそれだけでは発展的成果は生れない、塚を築くには何にかがある。それを知りたいものだ。

### 国光の塚群について

国光という所は北は久ノ崎、東は光安深沢の集落に囲まれた。長さ八百米、幅百米の丘陵の総称で、北東の端近くに諏訪神社中央辺りに八幡社が祀られている。丘陵が南西に延び切った先端部に十基の塚が直列に築かれている。舌状に延びた先端から二号塚を数え、斜面を登り切ったやや平らな所に十一号塚がある。伝承によればこの丘陵の何れの辺か定かではないが、中世末に国光鍛冶が住んでいたといわれている。また十一号塚から約二百米の位置に、深沢城主村山氏の館があったとの言い伝えもあり、石祠が建てられている。いったい十基の塚を数える塚群の性格は何んなのであ

らうか。塚の立地に立てば遠く西に米山薬師を臨み、東に八石の御島石部大明神を、金倉に少名毘古那の神を拝するに、またとない場所であったのかも知れない。古代人の思想からみると、「ソラ」または「テン」におわす神が地上に「アマ」降る場所は、その地のもっとも高い「タシフル」峰でなければならなかった。仏教にしてもわが國に伝えられた初期のころは知らず、平安のころからになると修行僧によって、山に籠り仏の来迎を求めることが修行の一つであり、山に堂宇が建てられるに至ったのであろう。

時代が降って、仏教が庶民のものとして密着するようになって、村里に堂宇が建立されても、寺は山号を必ず称号して今日に至りきたった。かつて民俗学者宮本富一氏は、「中世期には行者の流れが二派あり、一方は石を立てることをもっぱらにした念仏型、なかでも時衆聖、もう一方は塚を築く山状の活躍を想定」していたという。塚は墳墓と意味あいがちがついて、そこには神仏の臨界として土を盛り山を築き、神仏の来臨をねがう聖なる場所であり、神仏を行者を介して信者との間に繋りを保とうとしての手段を行う、祭りの基壇の性格をもっていたのではないか。後世に移るにしたがって、供養のためにしばしば築かれたのかも知れない。このように考えてみると塚も、単に境を示す標示だけのものではなく、境を護る地神の籠り給う所として、塚は築かれたのかもしれない。

ならば国光の塚群はいったい何の意味をもつであろうか。先の山城の尾根に築かれた塚群と同様、全くのところ解っていないのである。しいて志向すならば行者によって、神または仏の臨界を示すものとして塚は築かれたのではないか。国光の塚群の立地とは尾根を通じて、直線で約三糸の地点にある金倉山は少名毘古那の神を祀っている。この少名毘古那は薬の神で、しばしば農の神としても崇められていたのではないだろうか。一群の塚を築くにはそれなりの意味や理由がなければならない筈なのだが、残念ながらその塚のもつ心的構造に触ることのできないもどかしさがある。山城と一直の尾根に築かれた塚群にしても、金倉と国光の塚群にしても、山城の大手なり、山の社の正面なりに正対する形での立地に塚が築かれていることに、何にかの共通性を感じるものがある。塚群がその本体である山城なり、山の社なりを護るために何にかなのか、またそのもの何にか神秘的なものの交流を考えるべきなのか、それは未だ解っていないのである。山城については北条地域で三つの城跡を数あるなかあげたのだが、他の城には塚は伴っていない。つまり主たり得る山城にしかこのような一群の塚の付属をみることができない。国光塚群の場合一部の塚であっても、本格的な発掘がなされたのは、当柏崎市内では初めてのことであり、資料的な点で不足していく結論にすこしでも近づこうとするに、比較すべきものがなく唯々今後の研究にまつ以外に方法がないのは、いかにも残念なことである。少くとも塚が一基であっても數基の単位であっても、現在のわれわれの生活に関わりのないことは、問題意識はあってそれを解く鍵になるものを見失していることである。本稿におおかたの異見はあるが、それはそれなりに甘んじてうけるつもりである。

図版第1図



遺跡遠景（北側から）



遺跡遠景（南西側から）



7号塚（北西側から）



8号塚（北西側から）



9号塚（北西側から）



9号塚 発掘スナップ



9号塚E F断面（北東側から）



9号塚A B断面（西側から）



9号塚基壇部（北西側から）



9号塚基壇部（南側から）



10号塚 (北側から)



10号塚 発掘スナップ



10号塚G H断面（北東側から）



10号塚B C断面（西側から）



10 号塚 南東部溝発掘スナップ



10 号塚 南東部溝土層断面（北東側から）



10号塚基壇部（南西側から）



10号塚基壇部（北西側から）



11 号 塚 (北西側から)



11 号 塚 発掘スナップ

図版第 11 図



11号塚 C D断面（西側から）



11号塚頂部礫出土状態（西側から）



11号塚基壇部（北西側から）



11号塚基壇部（南西側から）



調査区全景（北東側から）



縄文土器出土状態（西側から）



繩文土器



繩文土器・須恵器



石斧・剝片・礫



免掘調査參加者



柏崎市埋蔵文化財調査報告第3

## 国光の塚群

新潟県柏崎市国光の塚群発掘調査報告

昭和58年3月28日印刷

昭和58年3月31日発行

発行 柏崎市教育委員会

印刷 わかい印刷

## 国光の塚群発掘調査報告書正誤表

ページ	誤	正
5ページ26行	3 矢口城跡	3 矢田城跡
28行	14 オカラシバ塚群	14 オカラシバ塚群
9ページ14行	築造当時は同溝底から	築造当時は周溝底から
23行	同溝があり、	周溝があり、
30行	築造当時は同溝底から	築造当時は周溝底から
17ページ左5段		左から21、22を入れる。
18ページ27行	屋根上に	尾根上に
19ページ17行	10号塚の関係10号塚築造の	「関係」のあとに「同様」を入れる。
22ページ22行	山城と一直の	山城と一連の
図版第6図		写真説明文を上下入れかえる。